歴史地理学　55－5（267）23-38　2013. 12

気候災害・防災祈願と古代・中世の気候変動

田　上　善　夫

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．気候の祭祀と古気候復元
　(1) 記録に残る祈雨祭祀
　(2) 民間の祈雨と記録
Ⅲ．祈雨の地と変容
　(1) 古代の祈雨儀礼
　(2) 祈雨の国家祭祀
　(3) 祈雨神の変化
　(4) 祈雨と仏神の影響
　(5) 民間の祈雨
Ⅳ. 祈雨の出現の変動
　(1) 祈雨とその史料
　(2) 祈雨と気候復元
　(3) 9世紀末前後の変動
Ⅴ. おわりに

Ⅰ．はじめに

歴史時代の気候復元に用いられる代替資料に，天候や気候災害などの史料がある。顕著な気候災害に際して，しばしば行われた防災祈願も，気候復元に有用である。とくに祈雨・雨乞は，農耕社会での重要な行事の一つであり，その記録は気候との高い関連性や，祭祀としての普遍性がある。この祈雨記録を用いて，日本の古代・中世の気候復元が試みられている[1)]。

この祈雨の祭祀や習俗は，歴史時代を通じて行われ，現在も世界的に行われている。祈雨は著しい高温乾燥状態，さらに干ばつの際に行われる。そのため祈雨からは，主に暖候期の高温乾燥，冷涼湿潤の変動などの復元が期待できる。

ただし祈雨の様式は，世界でさまざまである。祈雨という祭祀が，均質性をもつという性格が明らかであれば，それによる気候復元の信頼性も高まる。そのため，祈雨などの行事について，その行われた地域や時代，さらに信仰などの背景とのかかわりも明らかにされる必要がある。

そのため本論では，まず祈雨記録と気候について，為政者による国家的な祭祀と，民間で行われた祭祀について概観する。次に歴史時代を通しての，祈雨の様式や行われた地などの変遷を，明らかにする。さらにそれにもとづいて，祈雨記録による日本での古代・中世の気候変動の復元を試みる。

Ⅱ．気候の祭祀と古気候復元

(1) 記録に残る祈雨祭祀

西アジア

中東においても，雨乞（イスティスカー）は，イスラム以前からの慣行で，モーゼやムハンマドも行ったという。現在も断食明け祭礼やメッカ巡礼の締めの犠牲祭に準じる，半公式行事である。直立，お辞儀，跪拝のラクアを１～４回し，クルアーンを読誦し，神は偉大なり（タクビール），と唱える。導師（イマーム）はキブラ，メッカに向かい両手を挙げ，雨を与えたまえと祈る[2)]。日本では，神

キーワード：干ばつ, 祈雨, 気候復元, 中世, 日本

道，密教や習合的な様式での祈雨がなされ，さらに祈雨は時代的・地域的に変容した。乾燥地域では，祈雨祭祀も不可欠であるが，イスラムでは唯一神を対象にすることもあり，様式も比較的限られるようである。

イスラム圏での文書史料中の気候情報は，年代記，紀行，日記などで，故郷と近辺の出来事についての報告などに含まれる。洪水，干ばつ，異常寒冷や乾燥の冬などで，収穫高，食糧供給，経済・社会危機などへの影響も記される。内容は主に乾湿である[3]。すなわち，農耕に影響する降水が，情報の中心である。乾湿にかかわるため，上述のイスティカーも，記録されている可能性があるが，詳細は不明である。

中国

中国ではBC 5 世紀頃の詩経，論語などで，祈雨に関して，霊祀という天子の雩（あまごい）や，水神の降福を祀祷する巫舞が記される。後には，龍が水神とされるようになった[4]。BC 2 世紀に災異説を展開した董仲舒は，請雨の儀式に土龍を作るが，民間習俗に起源があると記した。また，薪の上に自焚して，雨を祀った[5]。

中国の気候災害記録が，編集されている[6]。古代中国では国家または民間で祈雨祭祀が行われていたが，これらに先んじて，甲骨文にも多くの雨が記される。770BC以降の春秋時代より，大干や大水が連続的に遺されるようになる。同様にして雩，大雩が記されるようになる。

朝鮮

朝鮮半島には10-14世紀に高麗があったが，高麗史，高麗図経，東国李相国集に，巫俗による200回の祈雨祭が記される。高麗の後の李朝でも，李朝実録に120余の巫の記録がある中で，一番多いのが祈雨である。今でも祈雨祭が，山上で行われる[7]。

ソウルでは，祈雨祭を，宗廟社稷と四大門で行った。また五龍祭を，四橋と中央の鐘閣で行った。さらに雨乞を，慕華館，慶会楼，春塘台，先農壇，漢江の岸辺等で行った[8]。

日本

日本では祈雨行事の起源は明らかではないが，風土記や記紀に記される。出雲国風土記，肥前国風土記に，祈雨に霊験のある石がある。正史には，皇極天皇元（642）年の祈雨四方拝がある[9]。さらに祈雨は，諸神，諸社，名山大川，丹生川上社が対象とされる。桓武・平城朝では丹生川上社は雨師神とされ，嵯峨朝では貴布禰神や室生山上龍穴があらわれ，特定社での雨乞が盛んとなる。また密教により五穀豊穣のための雨乞修法がされる[10]。祈祥除災の中でも，祈雨は神道的祭祀が主で，攘疫は仏教的儀礼が優先し，また儒教的表現は祈雨に限られる。祈雨は祈祥的な積極的儀礼で，奈良朝では国家の統合的機能を強く示す[11]。

このように日本の古代の史料に残る祈雨は，国家祭祀であることが特色である。各地で祀られていた雨の神に対して，国家により神道的な様式で祈雨祭祀が行われ，後に仏教的儀礼がおこなわれるようになる。多様な様式の変遷がみられるが，一つの干ばつに際しても，さまざまな様式で行われた。

(2) 民間の祈雨と記録

古代日本でのように，祈雨は国家的に行われ，為政者の意志や宗教者の呪的行為など複雑な内容を含むが，多くの記録が残されている。一方，繰り返される干ばつ・飢饉に際して，祈雨は民間でも盛んに行われたが，その記録について検討する。

祈雨の世界的類型

世界的には雨乞は，比較的温暖，暑熱の地域で，農耕民，狩猟採集民，遊牧民により行われている。祈雨の類型として，1）未開農耕民は雨を支配する死者の墓前で，2）穀物栽培民は動物供犠で，3）高文化農耕民は人身供犠で，4）また聖所に行列をして行く，5）踊って

雨の神を喜ばせる，6）泉などを汚す，7）聖像を泉に浸し神を責める，8）裸の女を出す，9）天と大地をつなぐ田畑を犂耕する，10）山の上で火を焚く，などがある[12]。

上記のように，雨神は擬人化され，この雨神を喜ばせる，怒らせる，創造させることにより，雨を引き出そうとしている。ただし，民俗行事として祈雨が行なわれれば，時期や規模はさまざまとなる。斉一的でなく，祈雨の意味も変容していることが考えられる。

日本での民間の祈雨行事

日本の民間での雨乞行事には，雨乞・立願，祭壇の清掃，雨乞地蔵，垢離・宮籠り，神水・牛の首，念仏・太鼓，幟立て，千本松明・千燈明，神楽，雨乞能・雨乞面，雨乞歌，雨乞獅子・竜頭，太鼓踊り，笹踊り，風流などがある。これらは，1）祭場・祭具の浄化，祭場表示，2）神出御，3）神饌・幣物，4）神態，5）芸能に分けられている。

雨神が祀られるのは，雨宮・雨降神社，竜王・竜神社，貴布禰・雷神・弁財天社，竜王山・雨乞岳などである。雨乞では，水神の霊地から，霊威を負った神水を頂戴する。潮汲みもまた同様である。また，秋葉山，金毘羅山のように，火を焚いたり，雲を焙る。盆，雨乞，虫送りの火は，同質である。山上に祀られる竜王は，水神で，経とともに日本に入った[13]。

民間での祈雨の意味

中国の陝西省華県では，雨乞には村の代表者が崋山西岳に登り，御神水を受けて帰ると，村人総出で雨乞の背花太鼓踊りで迎えた。五色の神花5本と魔よけの鏡をつけ，太鼓を叩きながらアーウアーウ，またナアナアム，ミィトゥフォ（弥陀仏）と唱える[14]。

干ばつのときには水神の地に詣でて神水を受けて帰り，神水を田に撒いて雨を祈ることは，多くの地で行われている。

また黄土高原東端の山西省盂県西部では，雨乞は大躍進や文化大革命で衰退したが，続いている。選ばれた雨官が他村から大王像を盗むと，村人は銅鑼やチャルメラで迎え，安置して三日三晩跪いて祈る。雨が降ったら，新しい着物を着せて返しに行く[15]。

ここでは神水というより，水神を受けて村に戻る。大王像を「盗む」のは，旱魃のときには天の帳面に雨を降らす計画はなく，雨は秘かに降らねばならないためという。天を騙すので，支配権力と結びつかず，農民の集団的行為として続く。迷信とされる一方，雨乞をする者には誠実さが要求されるといい，また大王像が盗まれる村と盗む村の間のつながりには，地域社会の構造がみられる。

民間の祈雨記録

若狭高浜の佐岐治神社では，宝暦6（1756）年に遡り，旱魃の時に鐘を海に浸すと，姉鐘に会うのを喜んで雨を降らすといわれる。奈良県の桜井市，磯城郡，宇陀郡，吉野郡などでも，鐘が水に漬けられる[16]。

朝鮮半島での祈雨祭では，天神と雨神に対して，山などに祭壇を作り祈願する。また，全羅道コクソン（谷城）や，チャンソン（長城）などでは，祈雨のときに婦女子が小便をするという[17]。

また止雨も祈雨と深くかかわる。牟礼は山を表わす韓語で，日牟礼では止雨祈願，日乞いがなされていた可能性がある。富士東麓では濃霧と長雨に悩まされ，御殿場市では天上焙りをしたが，天道念仏，雲霧不動明王もある。熊野那智大社では，七月十四日に止雨の象徴の白馬を描いた馬扇が登場する。飯田では，赤崩の滝に竹筒二本を持って迎えに行き，氏神に供えた。青森県鰺ヶ沢では馬の頭蓋骨を掘り出し，縄で縛って沼に沈めた。九州山地では月役の女性を先頭に行列を組み，笛太鼓で山上池をめざした[18]。

能登半島，石動山頂の鰯が池では，大壇を設け，不動，虚空蔵，観音を安置し，十八道念誦次第を基本とする雨乞法を，1日3回修法した。また麻生と清水平間の雨乞石で，明

治10年代（1877～1886）に，雨乞いがされた。鹿西町の本土寺七面堂では，大正13（1924）年に雨乞御本尊の請雨曼荼羅をかけ，雨乞太鼓が打たれた。七尾市清水平の谷では昭和2（1927）年に，7日間水垢離し，緑色の縫い糸でかたどった龍神を雌雄岩の淵に放ち，108個の杏梅を投じた[19]。

上述のように，現代も民間で祈雨が行われ，山の池や谷の淵など，水にまつわる地で行われることが多い。その様式には，密教や修験の影響がみられる。加持祈祷の修法，また自然における験力は，現代の祈雨にも通じる。こうした民間の祈雨の儀礼は，宗教者のみならず，村の代表によって行われることも多い。その様式には，呪的な秘儀，祈祷も含まれる。このことは，民間の祈雨は記録には結びつきにくいことを示している。

Ⅲ．祈雨の地と変容

（1）古代の祈雨儀礼

祈雨の記録と様式

日本の古代・中世には，祈雨は六国史中の続日本紀に57，日本後紀に63，続日本後紀に52，文徳実録に9，三代実録に75の記録がある[20]。これに日本書紀も加えて，祈雨・雨乞が抽出され，それらの様式が神祇，仏教，習合，他に分類されている[21]。

祈雨の記録について，年ごとの出現数を集計し，さらに10年ごとに経年変化を示す（図1）。なおここでの出現数とは，祈雨祭祀の延べ数である。干ばつに際して祈雨祭祀が行われても，降水がなければ繰り返し祈雨祭祀が行われる。それには異なる様式でも行われる。干ばつが厳しければ，祈雨祭祀の回数も多くなると考えられるが，程度と出現数の関係は不明である。

祈雨の記録は7世紀半ばにはじまり，7世紀末から増加して，10世紀にピークを迎え，12世紀にやや減少する。祈雨の様式は，神道的なものが最も多く，かつ継続して行われている。様式が仏教的なものは神道なものにくらべて出現が遅いが，9世紀に急増するようになり，10世紀にも継続して多い。習合的な様式のものは10世紀に集中してみられる。このように様式からみると，祈雨は9世紀はじめより多様化するようになり，10世紀に最も

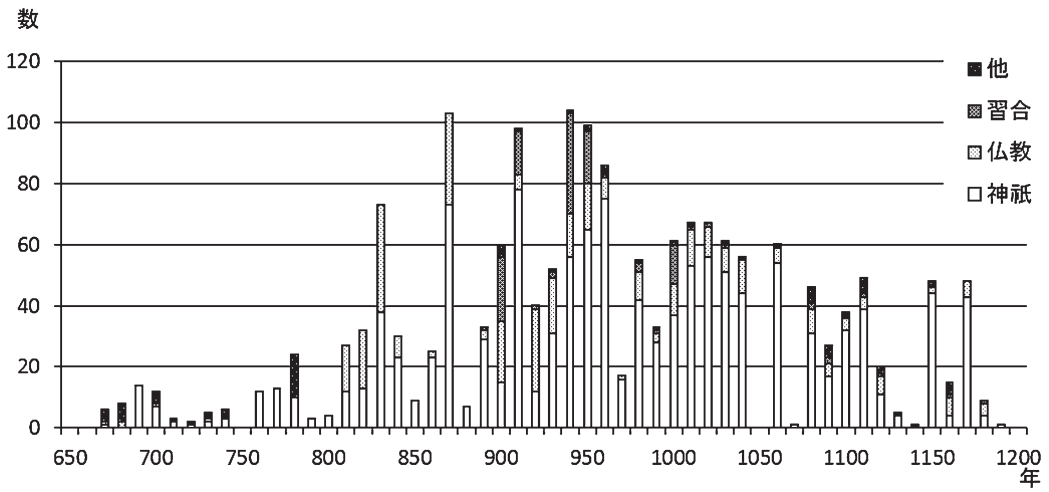

図1　古代・中世の祈雨回数の変化

祈雨に関する防災祈願行事の記録数を，神祇，仏教，習合の様式に分けて10年ごとに集計。
資料は，藪　元晶『雨乞儀礼の成立と展開』岩田書院，2002。

多様となるが，11世紀以降には再び神道的な様式が主となる。

祈雨祭祀は，定時において行われることもあるが，祈雨祭祀の記録では斎行日が不定であって，大半が臨時祭とみられる。祈雨祭祀が行われる前後は継続して降水がなく，干ばつが懸念される天候状態と考えられる。そのため祈雨は，気候変動の復元の重要な代替資料となる。

祈雨は13世紀以降にも地方や民間での祭祀として行われるが，12世紀以前の記録は国家的祭祀を中心としており，とくに神道様式が継続している。この期間内での祈雨記録が比較的斉一なものであることも，気候復元の代替資料として価値が高いと考えられる。

ただし，祭祀の出現数の変動は，乾湿の相対的変動を示すとしても，降水量の変動に置換することは困難である。

(2) 祈雨の国家祭祀

古代の祈雨は，先述のように六国史に多くの記録がある。六国史それぞれは成立年代が異なり，また失われた刊本もあるが，正史として，比較的斉一の様式をもつため，基本的資料として，祈雨記録を抽出する。すなわち日本書紀（～697）・続日本紀（697～791）・日本後紀（792～833）・続日本後紀（833～850）・日本文徳天皇実録（850～858）・日本三代実録（858～887），の期間内で，祈雨の様式，奉幣の方法，対象，地域などについて，出現の変化を明らかにする。ここでは一括して10年ごとの延数を集計する。なお資料として，『日本古代史料本文データ』を用いる。また『六国史所見の「祈雨・祈止雨」記事』[22] とも対照する（表１）。

祈雨と名山大川

先述のように祈雨様式は大きく神道的，仏教的なものなどがあった。祈雨の対象としてこれまでにも，続日本紀に芳野水分峯神，日本後紀に吉野山陵，室生山上龍穴，三代実録に葛木水分神，都祁水分神，吉野水分神の名があること[23]，また祈雨の特定社として，奈

表１　祈雨の様式の変化

	祈願		神道的方法				仏教的方法				対象					地域		神社A			神社B				神社C									寺院		その他				
	祈雨	止雨	遣使・奉幣ほか	奉黒毛馬	奉白毛馬	奉馬	読経・仁王経ほか	転読・大般若経ほか	修法・請雨経法・術		名山大川	諸社・諸神社	群神・諸神・神祇	名神		京畿内	畿内七道・天下	丹生川上雨師神社	貴布祢神社	伊勢大神宮	賀茂御祖神社	賀茂別雷神社	松尾大社	乙訓神社	垂水神社	住吉神社	稲荷神社	水主神社	大原野神社	木嶋神社	その他			大寺	諸寺	山林	山陵	京	神泉苑	地方
681–690	2									1						1																							
691–700	12		10			2					1	8				2															3							
701–710	10		10								4	5				4																						
711–720	4		3								2	3				1															2						
721–730	2		3								1		1																								
731–740	4		5								2		2			3																						
741–750	6		5								1	3				2	1																			1		
751–760																																						
761–770	1		4	1									4			4		2																			
771–780			3	8	3	1							2			2		11													1						1
781–790	8		6	1										2		5		1		1																	
791–800	3	1	3	1	1									1		2		5																			
801–810	6	2	8	1										1		1		5			1	1	1												1		1
811–820	18	4		1	1		2	2						3		2	3	4	5	4	1	1									2	2	2	2	2	3		1
821–830	11	6	14		1	2	2	2					1	2		2	2	5	4	2				1							4	1	1			3		1
831–840	23	16	27		2	1	4	8	2		2		2	10		3	7	12	9	6	6	5	6	2	3	3					4	5	2	2		6		2
841–850	15	3	12				4	5						4		2	2	5	4		3	3	4	3	2	2									7		
851–860	4	7	9			2						1						3	3	3	4	4	4	3			2	1			45							
861–870	9	6	13	1			1	5					3			1	3	2	2	2	4	4	1				1	1			3					4		
871–880	32	5	24	5	2		5	12	9		1	2	2			1	1	14	9	3	11	11	10	8	1		8	1	2	2	7	4	2		2	10	5	1
881–887	3	5	4	1	4			1					1					8	5	1	4	4	4	2			4	1			1							1
	173	55	163	20	14	8	18	35	12		14	22	18	23		38	19	77	41	22	34	33	30	19	6	5	15	4	2	2	26	14	7	4	5	34	5	8

注：日本古代史料本文データ（http://ifs.nog.cc/kodaishi-db.hp.infoseek.co.jp/）の六国史より抽出。
方法，地域，社寺などの記録数を，10年ごとに集計。

良末に大和神社の別社の丹生川上社，平安始めに貴布禰社が現れることが指摘されている[24]。

祈雨についての，神道的，仏教的方法の内容，対象，地域，神社，寺院，その他での集計結果には，時代による変容がみられる。

さまざまな祈願対象の中でも，祈雨記録の初期の690年代ころから，名山大川および諸社が現れているが，720年代には群神，さらに780年代には名神へと変わっている。

神道的な対象の中でも違いがあり，書紀では，諸社に「詣」で，広瀬大忌神と龍田風神を「祀」り，名山岳涜を「祷」，「祠」しむと使い分けられる。祷と祠は，名山大川に座す神祇を奉斎し，雨乞儀礼にのみ用いられる[25]。個々の名は記されないが，山と社と神とは扱いが異なっていた。名山大川，諸社が群神に先行することは，祈雨の対象は主として土地，地域であったことを示す。

対象は名山大川・諸社から群神へ，さらに明神に移っていった。明神は780年代から現れ，同時に名山大川・諸社・群神が半世紀ほどみられなくなる。これは，平城京から長岡京・平安京への遷都の時期にあたる。そのため，名山大川・諸社・群神と明神は異なることが考えられる。

祈雨の対象範囲

奉幣の対象として，固有名の示されない諸社や明神がある。それらの範囲が示される場合，五畿内であることが多い。また，七道あるいは天下と記されることもある。都周辺の京・畿内と，全国である畿内七道・天下のように分けると，800年代まではほぼ前者の京・畿内に限られる。一方，後者の畿内七道・天下は，810年代以降に現れるようになる。

ここで国家的祈雨奉幣の対象地域は，畿内にとどまるが，古代王朝の直接支配を示すといわれる[26]。また，8世紀には，飢饉は畿内諸国をはじめ近江，尾張，備前，備中，讃岐などに集中していたが，平安初期には東北，瀬戸内などで増えたという[27]。

七道・天下の範囲は文字通りの全国ではなく，また飢饉の発生地域も全て記録に残るわけではない。ただし，奈良時代から平安時代にかけての対象範囲の拡大には，政権の支配範囲の変化や，気候的な変化の可能性が考えられる。

なお，祈雨・止雨は，7，6，8，5月の順に多い[28]。これは梅雨期から盛夏期にあたる。

(3) 祈雨神の変化

多くの神々が水にかわるが，とくに雷神や蛇神は水神である。雷神は賀茂分雷社のように，雨水を司る。竜王は請雨経法の対象とされる。また山口社は山の雨神を祀り，峰の神も祈雨に霊験がある[29]。

六国史以降になると，祈雨の対象，様式などには変化が現れる（表2）。

祈雨神祭八十五座

前述のように，名山大川，諸社，群神，明神などと記されるときに，個々の社，神は不明である。しかし，天平宝字7（763）年に丹生川上社，弘仁9（818）年には貴布禰社が現れるようになると，数社から十社ほどの社名が出てくるようになる。とくに貞観元（859）年には，賀茂御祖等京の6神社，山城6神，大和27神，河内2神，和泉1神，摂津9神の名が記される。とくに山口14神，水分4神の名がみえる。

これは延長5（927）年の延喜式，臨時祭の祈雨神祭八十五座に記された社名に対応しており，山城の月読神がある一方，大和の太社，瞻駒社を欠くのみである。ほぼ同一であることは，延喜式の祈雨神祭八十五座は，日本三代実録の記事によるとみられるが，68年間に，祈雨神が安定していたことが考えられる。

これらの八十五座は，とくに大和盆地南部

表 2　祈雨の様式の変化

西暦	祈願		神社等						地域		寺院等									読経			祭場等			修法			
	祈雨・請雨	祈止雨	丹生貴布禰	伊勢大神宮・豊受宮	賀茂御祖・別雷社	室生龍穴	その他	諸社	五畿内	七道・天下諸国	七大寺	十五大寺	東寺	東大寺大仏殿	延暦寺	その他	諸寺	大極殿	他宮中	（読経・転経）	大般若経	仁王般若経	陰陽寮	神泉苑	醍醐寺清龍権現	（修法）	請雨経法	孔雀経法	その他
811–820	1					1				1																			
821–830	3							1	2	2		1						1	1		1	1		2			1		
831–840																													
841–850																													
851–860																													
861–870																													
871–880	3	1			1		1	1				1				1		1			1			3			1		2
881–890																													
891–900																													
901–910	2						1		1	1						1					1			1					
911–920	1					1														1			1	1			1		
921–930	3						1				1						1		1	1				3		1	2	1	
931–940						1				1										1									
941–950																													
951–960	2		1	1	1	1	1	2		1	2		1	2	1			1	1	2			2			1		
961–970	4	1	2	2		1	1	1			2	2		2				1	1	3		1	1	1		1		
971–980	2																							1			2		
981–990	2																							2			1		
991–1000	1																							1					
1001–1010																													
1011–1020	2																							2			2	1	
1021–1030																													
1031–1040	1																	1		1		1		2			2		
1041–1050	3										1	1		1	1			1	1	1	1	1		2			2		
1051–1060																													
1061–1070	1																							1			1		
1071–1080																													
1081–1090	3		1			1	1						2	1		1				2				3	2		2	2	
1091–1100																													
1101–1110	1					1		1			1		1	1	1			1		1		1		1			1	1	1
1111–1120	1																							2	1		1		
1121–1130	1																			1					1			1	
計	37	2	4	3	2	7	6	6	3	6	7	5	4	7	3	3	1	7	5	14	4	5	4	28	4	1	21	6	3

注：続群書類従完成会「祈雨日記」『続群書類従 第25輯下』，1933，217-240頁より，祈雨の回数を10年ごとに集計。

周辺に位置している（図2）。大和川の南の源流地域の旧高市郡を中心に，吉野郡，宇陀郡，山辺郡，添上郡にも多い。京都盆地周辺を除き，先述の諸神等が含まれていることが考えられる。

式内社もこの地に多く，雷，川，石，水，山の神名が多い。奈良遷都後に，神名帳の十四所，さらに四時祭式の十三社となる。広瀬・竜田を常祀，祈雨を臨時祭祀とした。広瀬，龍田は，大和川の合流地点で，他の山口や水分を統合する位置にある。この天武の神祇政策は，対氏族策＝皇親政治に類似する[30]。

祈雨と二十二社

個々の祈雨の記事に於いて，祈雨神八十五座の名があげられることは他にない。祈雨で社名が記されるのは先述の丹生川上，貴布禰が多く，また伊勢もしばしば記される。

大同4（809）年には，止霖雨のために，松

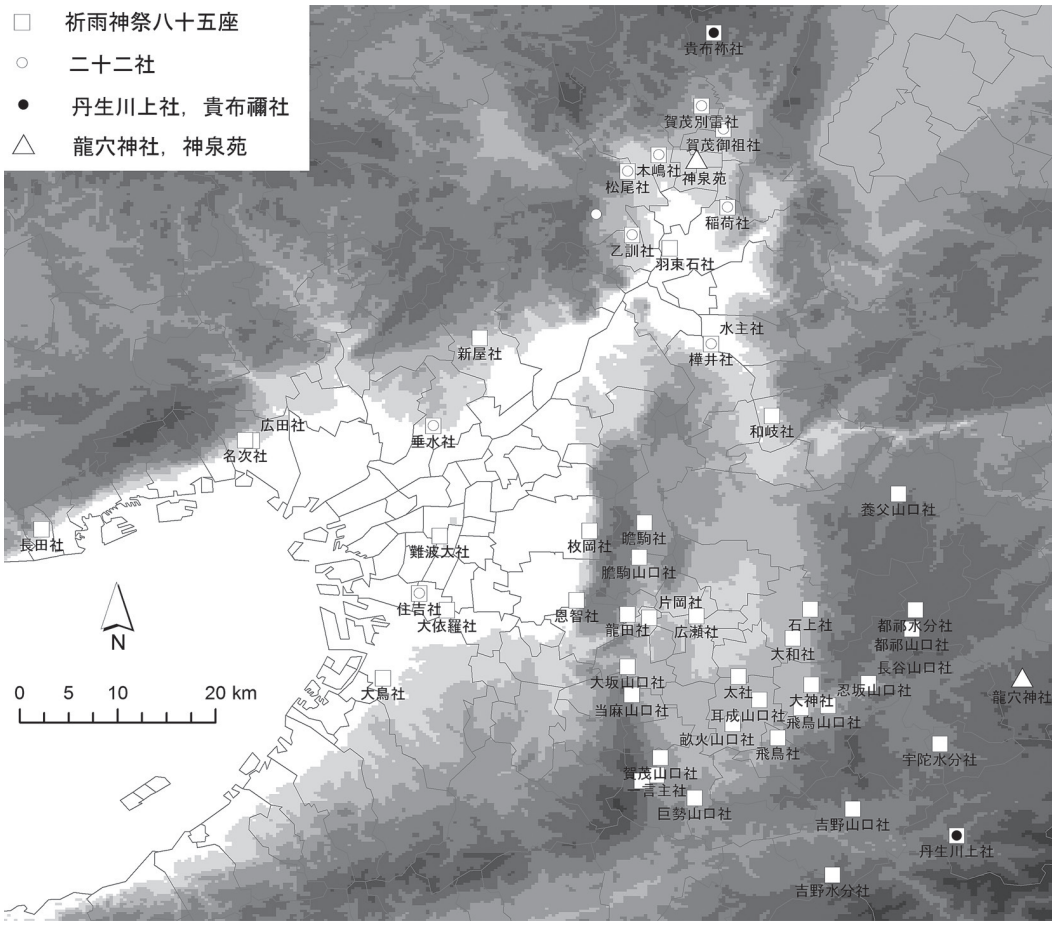

図 2　古代の祈雨祭祀の地

祈雨神祭八十五座は，虎尾俊哉編『延喜式上』集英社，2000より。
延長 5（927）年の式内社の位置は，以下での比定にもとづく。
式内社研究会『式内社調査報告 1　京・畿内 1』皇学館大学出版部，1979
式内社研究会『式内社調査報告 2　京・畿内 2』皇学館大学出版部，1982
式内社研究会『式内社調査報告 3　京・畿内 3』皇学館大学出版部，1982
式内社研究会『式内社調査報告 4　京・畿内 4』皇学館大学出版部，1979
式内社研究会『式内社調査報告 5　京・畿内 5』皇学館大学出版部，1977

尾，鴨御祖，鴨別雷等の社に奉幣される。この賀茂下・上両社と松尾社，また乙訓神社および稲荷社は，前 3 社のほかでは最も多い。それぞれ，賀茂川，桂川を控える地である。承和 3（836）年には，垂水，住吉社も祈雨奉幣される。

祈（止）雨数社奉幣の回数は，大同 4（809）年から醍醐朝末（～930）にも同様であるが，前述の社の他に，水主 4，石清水 4，木嶋 3，平野，広瀬，龍田，大鳥，積川，長田，廣田，生田，大依羅の各 1 がある[31]。

応和 3（963）年には，祈雨奉幣が十六社になされる。すなわち，伊勢，石清水，賀茂，松尾，平野，稲荷，春日，大原野，大神，石上，大和，広瀬，竜田，住吉，丹生，貴布禰である。

さらに長暦3（1039）年には二十二社が定まり，永保元（1081）年に制度として確立する。これには丹生川上，貴布禰のように雨の特定神をはじめ，祈雨神祭八十五座の17社が含まれており，祈雨がこの11世紀においても重要な祭祀であったことを示している。

（4）祈雨と仏神の影響

初期の仏教的祈雨

仏教的な祈雨も行われていたが，慶雲2（705）年と天平4（732）年には，祈雨は神祇，仏事の順にされる。天皇は神祇祭祀を統括するが，仏教とは直接かかわらない。続紀では神祇に祈雨が叶わぬと，徳政的な対応，仏教への祈願がされた[32]。

670年代以来，仏教的な祈雨も行われていたが，神道的なものに従属するようになることには，飛鳥浄御原令以降の律令制の影響も考えられる。

平安京の密教儀礼

仏教的儀礼は，平安京への遷都後に急増するようになる。810年代からは大寺，諸寺において行われるが，同時に山林や山陵への奉幣，また宮中の大極殿から，八省院，さらに紫宸殿で，読経や大般若経の転読が行われるようになる。

仏教的儀礼について，祈雨日記や西宮記等への引用から復元すると，祈雨は神祇信仰重視の建前であるが，現実の危機に際して仏教的に施行されるようになった，と指摘されている[33]。

さらに京の神泉苑では，特異な祈雨修法が行われるようになる。斉衡3（856）年に真言宗僧常暁が大元帥法，貞観17（875）年に大雲輪請雨経，延喜8（908）年に聖宝が請雨経法，長和5（1016）年に孔雀経法を修する[34]。

請雨経法は古代インドの大賓を饗応する儀式に由来し，密教行者は身・口・意の三密業法で真似し，善恕竜王を供養する。孔雀経法は，孔雀が悪草，悪虫，毒蛇などを食べることによる。請雨経法の修法に対し，孔雀経法は読経法会のみで，験者の霊力から経の神通力によるようになる[35]。

ここでとくに請雨経法は，神仏の習合のみならず，複雑な内容をもつ。雨を龍神に対して祈願し，巫術的な要素をも含む。10世紀に盛んに行われたが，11世紀になると次第に減って行った。さらに平安末には，国家的な祈雨の祭祀が減少していった。

鎌倉以降の祈雨

中世には祈雨は醍醐寺清瀧をはじめ，南禅寺や相国寺でも行われた。竜王，龍神信仰が普及し，龍と雷は同一視された。龍穴は江の島，石山寺などにあり，龍池は河内龍泉寺，法隆寺，東大寺，興福寺などにあった。中世にも神泉苑で修法され，丹貴，七社，八幡・金峰山，二十二社に奉幣される。また雨乞い踊りがされるようになる[36]。

（5）民間の祈雨

地方の祈雨祭祀

先述のような国家ではなく，地方においてまた民間で行われた祈雨は六国史には明らかでない。ただしその後に寺社などで半公式的に行われた祈雨の記録はみられる。

降雨の願いが叶えばする約束をして祈願する立願は，中世の法隆寺からはじまり，正和5（1316）年から正平20／貞治4（1365）年の記録がある。法隆寺龍池に建久年間（1190～1198）に龍王が勧請され，南北朝時代に発展し，近世以降の民間の雨乞立願へと続く。龍池で読経などの後に立願し，芸能や相撲をするが，神が喜び心を動かすことを期待する[37]。

山上の祈雨祭祀

近世には農民の共同祈願として，雨乞い・虫送りがされる。多度社，秋葉山，愛宕山，高野山，戸隠山で多い。雨の神，竜王信仰が盛んで，西日本に多い。山上の池などに竜王が祀られる[38]。寺社などの境内以外での祈雨儀礼は，先述の例のように，山や川で行われ

ることが多い。

また大宰府の，四王寺山南東の水瓶山（210m）で，雨乞がされる。江戸期にはあらゆる雨乞祈祷でも験のない場合に，原八坊の首座華台坊を中心にして行われた。雨乞には経筒を転用した水瓶とし，滑石製の外容器には僧侶の名が記される。天台系であったと考えられる[39]。

Ⅳ．祈雨の出現の変動

(1) 祈雨とその史料

前章のように，日本では律令制に向かう飛鳥時代から平安時代末にかけて，様式に変遷があるものの，国家を中心とした祈雨や祈止雨が繰り返し行われてきた。

祈雨の記録は皇極天皇元（642）年に始まり，7 世紀末の天武・持統年間（673～697）より増加する。平安時代には神祇的，また仏教的な祈雨が飛躍的に発展する。丹生川上や貴布禰をはじめ，畿内の雨また水に縁のある諸社に奉幣され，それらは延喜式での祈雨神祭八十五座にまとまり，さらに11世紀の二十二社にも多くが含まれていく。寺院また宮中での仏教的方法，すなわち読経・転読などでも雨が祈願される。さらに，祈雨の実効性の期待される中で，修法などが行われて，様式は多様化した。

ただし，祈雨や祈止雨は進行中の干ばつあるいは霖雨などに対して防災を祈願するものであり，気候災害に結びつき，それは気候変動に強く関係すると考えられる。

祈雨・祈止雨をはじめとする防災祈願行事あるいは気候祭祀に加え，干ばつ・霖雨のような気候災害の記録にもとづいて，気候変動の復元を行う。

気候祭祀の記録を得るために，最古の正史である六国史と，祈雨について収録した祈雨法日記をはじめ，雨言雑秘記，祈雨法記，等々を利用する。

(2) 祈雨と気候復元

六国史では，祈雨・祈止雨記録は，天武・持統朝の元号（688）年から，最終の元号（887）年まで，ほぼ定常的に得ることができる。また干ばつ・霖雨の記録は，それより早く7世紀初めから得ることができる。これらの記録はデータベースの関連用語を検索することにより，容易に抽出することができる。その記録を10年ごとに集計した延べ数を図示する（図３）。

図にみえるように，祈雨と干ばつ，また祈止雨と霖雨とはおよそ対応する。さらにこれらの気候祭祀は気候災害の記録のない期間についても得られている。これには気候災害が記録されなかった可能性もあるが，記録に至らぬ程度の軽度の気候災害の場合でも，気候祭祀が行われた，すなわちより詳細な復元の可能性を示すと考えられる。

祈雨法日記では，祈雨について掲載しているが，ほぼ平安時代を通した記録が得られる。そのため日本後紀以降について六国史の記録を補い，また重複する期間で六国史の記録と比較することができる。抽出した祈雨や止雨の年間出現数を集計し，さらに10年ごとに集計して図示する（図４）。

図より，9 世紀より記録は多く，10世紀に最も多くなり，11，12世紀まで継続している。一方10年間に一度も祈雨の行われなかった，期間もしばしば現れている。記録されなかった可能性もあるが，9～12世紀にかけて継続して集められているので，主要な祈雨行事は行われなかったと考えられる。

ところで六国史においても，祈雨にくらべ祈止雨の記録開始年代は遅く，かつ記載数は少ない。この差異は，止雨と結びつく霖雨や洪水は，干ばつとは継続時間や被害程度が異なるためと考えられる。そのため両者から乾湿などの気候変動を復元するには注意が必要である。

明らかに祈雨の増大する期間は，690～700

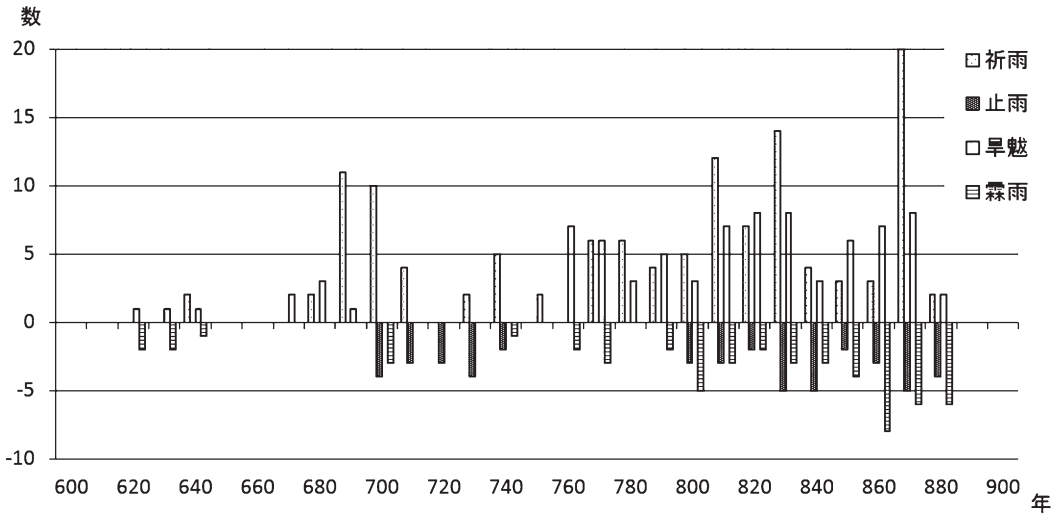

図 3　祈雨および旱魃と止雨および霖雨の回数の変化

六国史より 10 年ごとに記録数を集計。祈雨および干ばつの回数は正軸に，止雨および霖雨の回数は負軸に表示。
日本古代史料本文データ（http://ifs.nog.cc/kodaishi-db.hp.infoseek.co.jp/）の六国史より抽出。

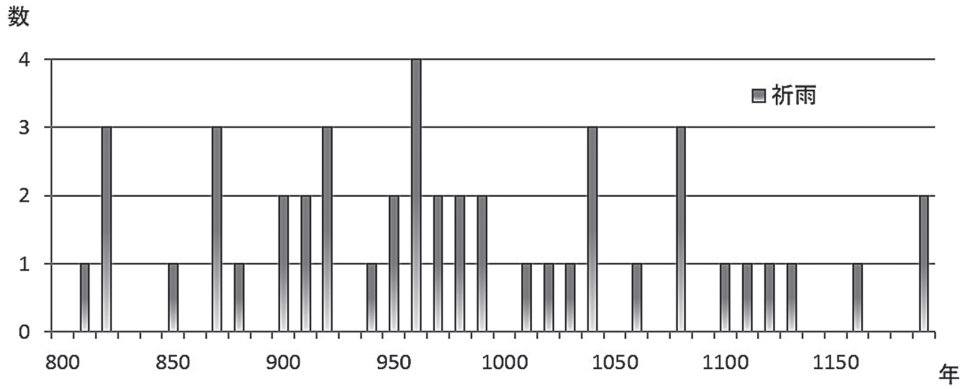

図 4　祈雨日記中の祈雨数の変動

続群書類従完成会「祈雨日記」『続群書類従 第25輯下』，1933，217-240 頁より，祈雨の回数を 10 年ごとに集計。

年代，810～830 年代，870 年代，910～920 年代，950 年代などである。

一方で祈雨が少ないか，止雨が相対的に多い期間があり，とくに880～890年代には祈雨が激減する一方，止雨はそれほど減っていない。さらに900年代には祈雨も増加するが，他の期間にくらべて止雨は非常に多い。

なお，祈雨より祈止雨が多い期間の一つは，およそ文徳実録の期間（850～858）に対応する。祈止雨が多く行われたことは，祈雨の必要性の少ない，すなわち湿潤な気候状態であったことが考えられる。ここで，文徳実録の期間について，文徳天皇の御代を聖代とするべく，水旱災異関係記事をなるべく載録しなかった可能性が指摘されている[40]。自然現象にせよ，正史の編纂者による恣意的な操

作が加わる可能性はあり，以下祈雨と祈止雨について，比較検討を加える。

祈雨あるいは祈止雨の記録が遺される場合，その内容からかなりの程度の気候災害が発生，あるいは発生が懸念される状態であったとみられる。気候災害でも，太平洋高気圧によりもたらされる干ばつと，前線活動にともなう霖雨とでは，被害範囲の空間的スケールが異なり，また被害程度も異なってくる。しかし，本来祈止雨の記録数は祈雨の記録数にくらべて少なく，水異の記録を残すことは，水旱災異の異常の把握にもなるため，意図的な操作が行われたとは考えにくい。

ただし，無降水と降水についてくらべれば，前者は長期間継続するのに対し，降水は比較的継続は短いか中断する。そのため，干ばつの際に祈雨を行っても，無降水期間が停止しにくいのに対し，霖雨の際に祈止雨を行えば降水が停止しやすい。すなわち祈願の効果を聖蹟として記録する，すなわち祈止雨がより多く収録された可能性は残る。

(3) 9 世紀末前後の変動

前述のように，9 世紀末には祈雨や祈止雨，干ばつや霖雨の変動が大きくなる。そのためこの期間について検討を加える。

この期間は六国史でも最後の期間にあたるため，終了する887年以降については，大日本史料を用いて，祈雨・止雨記録を抽出した。また比較のために，朝鮮半島および中国についての年代記[41]からも，同様の記録を抽出し，10年ごとの出現数の変動を図示した（図 5）。対象期間での中国での記録は，とくに京師や江淮のものが多く，唐の都である長安周辺を中心とする傾向がみられる。また記録の数は，9 世紀前半にくらべ，後半にはやや減少する。これには唐に内乱が続き，さらに907年の滅亡に向かう時代の影響が考えられる。

日本の旱魃・霖雨（図 5）に，祈雨日記中の祈雨（図 4）を加えて検討すると，880 年代・890 年代は，とくに祈雨および干ばつの記録の少ない期間である。また，霖雨の記録は比較的安定して継続している。一方でこの20年間をはさむ870年代と，900 年代・910 年代には，祈雨の記録が顕著に多い。これらのことは，9 世紀末の20 年間ほどは湿潤であり，その前後に乾燥する期間が存在したことを示すと考えられる。

朝鮮半島の旱魃・霖雨（図 5）は記録数が少ないが，880年代と900年代は乾燥の可能性がある。中国の旱魃・霖雨（図 5）は，870年代と900年代に霖雨の記録が多く，880年代と890年代は旱魃の記録が多い。このことは，朝鮮から中国，とくに中国では，日本とは乾湿の変動が正反対になることを示している。

記録された旱魃や霖雨は，おもに梅雨期から夏季の気候状態にかかわると考えられる。気象庁のメソ数値予報モデル（MSM）データから，日本列島周辺の大気状態を示すと，この期間には，日本列島から朝鮮半島，中国の東シナ海沿岸にかけて，類似の天候状態の出現がみられる[42]。それに対し，中国の内陸側では天候状態は異なり，このことが，乾湿の変動の差異にかかわることが考えられる。

ところで渤海より，神亀 4（727）年から延喜10（919）年まで，計33（35?）回の使節が来たことが明らかにされている。ロシアのポシェト湾，あるいは北朝鮮の咸鏡道付近から，秋から冬に出港して日本海を南下し，2 月ころに越前から能登あたりに到着する。温暖期には季節風は弱いが対馬暖流は著しく蛇行する一方，寒冷期には季節風は強まるが対馬暖流は弱まる。このことが到着位置にかかわり，初期には到着位置は一定しなかったが，9 世紀後半には寒冷化したとみられている[43]。

また前半は夏に東の京に近い豆満江あたりから出て越前から出羽に漂着し，後半は冬に南の京近くから出て半島に沿い，出雲から能

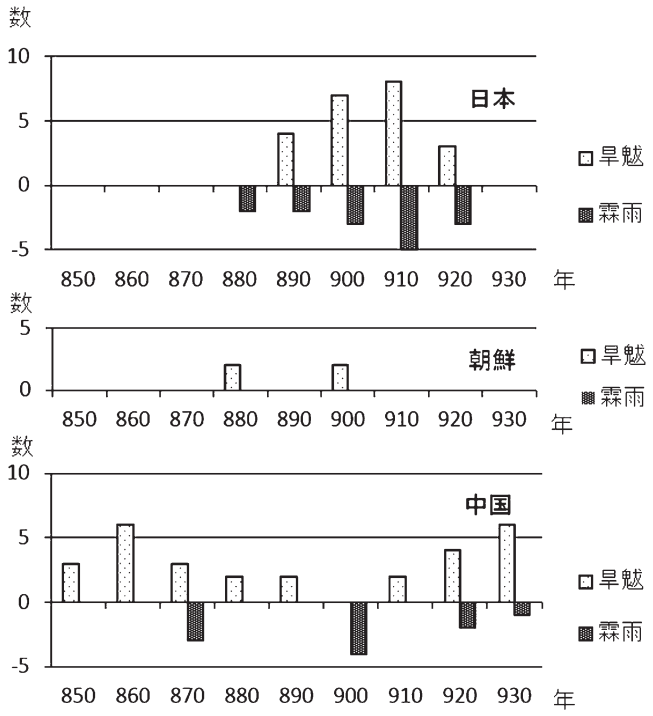

図 5　9世紀末前後の東アジア各地の乾湿の変動

記録数を10年ごとに集計し，旱魃は正軸に霖雨は負軸に表示。資料は，日本：東京大學史料編纂所編纂『大日本史料 第１編』東京大學出版會，1968，朝鮮：古代史獺祭「三國史記」(http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sitemap/sitemap.htm，閲覧日2012年２月11日)，中国：張　徳二主編『中国三千年気象記録要集第１冊』南京鳳凰出版社，2004，548頁。

登に漂着した。温暖な時に遠くに漂着したという[44]。このことは８世紀にくらべ９世紀の寒冷化を示すかもしれない。

上述のように９世紀末は湿潤期間とみられる。その前後は社会的にも不安定な時期であった。祈雨は農耕社会で普遍的に行われ，気候変動と結びつき，気候変動の影響を端的に示しているともいえる。この期間の社会的不安定は，日本だけでなく東アジアや世界各地でみられる。ただし，日本と中国では夏季の気候変動が異なっているため，詳細な検討が必要である。

Ⅴ．おわりに

本研究では，祈雨を中心にして気候祭祀や気候災害の記録について検討し，それにもとづいて古代・中世の気候変動の復元を試みた。その結果，気候祭祀の気候変動の復元の，代替史料としての可能性が明らかになった。さらに祈雨祭祀を中心とした気候変動が復元された。その成果は，以下のようにまとめられる。

１．祈雨祭祀の記録は，７～12世紀の近畿地方を中心に，多数残る。神道的，また仏教的なものなど様式が変遷したが，記録された祭祀の多くは国家によるものであるため，比較的に一貫性のあるものである。

２．祈雨は干ばつなどの気候災害の発生に際して行われる，臨時祭である。その実施は，常祭とは異なり，危急の時にあたる。そのため，祈雨記録は気候災害記録を補い，気候変動の詳細な復元を可能とする。

3．古代・中世の祈雨記録は，8 世紀ころより増加し，10世紀にはピークとなった後に減少する。このことは，10世紀の乾燥傾向を示す。ただしこの頃は，祈雨法が最も発展した時期にあたっている。

4．9 世紀末に，祈雨に対して止雨，旱魃より霖雨が増加し，湿潤化の傾向がみられる。とくに880年代から890年代に明瞭であるが，湿潤化は日本列島付近に限られる可能性がある。

（富山大学）

〔付記〕

なお，祈雨は国家による祭祀が中心であったが，対象とした古代・中世には，都が飛鳥，奈良，京都を中心に遷った。大和盆地の南部から，京都盆地の北部にかけては，干ばつや洪水などの気候災害が大きく異なることが明らかにされている[45]。また祈雨の対象とされた諸社も，分布の中心が南から北に移動したことが明らかになった。そのため，祈雨記録に対する遷都の影響について，今後検討を加える必要がある。

〔注〕

1）田上善夫「「中世温暖期（MCA）」と 9 世紀末の気候的不安定について」富山大学人間発達科学部紀要7-1，2012，91-105頁。

2）堀井聡江「中東イスラームにおける呪文―雨乞いを中心に」自然と文化そしてことば 1，2006，82-90頁。

3）Vogt, S., Glaser, R., Luterbacher, J., Riemann, D., Dyab, G.A., Schoenbein, J. and Garcia- Bu “stamante, E., “Assessing the Medieval Climate Anomaly in the Middle East: The potential of Arabic documentary sources”. *PAGES news*, 19-1, 2011, pp.28-29.

4）水原渭江「中国古代の雨乞い」（奥村隆彦・原 泰根編『沢田四郎作博士記念文集』沢田四郎作先生を偲ぶ会，1972），218-220頁。

5）出石誠彦「上代支那の旱魃と請雨」『支那神話伝説の研究 増補改訂版』中央公論社，1973，445-489頁。1935年初出，史観 8 。

6）張 徳二主編『中国三千年気象記録要集 第 1 冊』南京鳳凰出版社，2004，548頁。

7）任 東権『朝鮮の民俗』岩崎美術社，1969，280頁。

8）金 聖培『韓国の民俗』成甲書房，1982，322頁。

9）梅原隆章「日本古代における雨乞い」日本歴史74，1954，15-19頁。

10）逵 日出典「平安初期に於ける国家的雨乞の動向」神道史研究10-3，1962，49-55頁。

11）岡田重精「古代除災儀礼の諸相――日本書紀・続日本紀にみる祈雨と攘疫の儀礼を中心として」皇学館大学紀要10，1972，18-41頁。

12）大林太良「人類文化史上の雨乞い」（にひなめ研究会編『新嘗の研究4 稲作文化と祭祀』第一書房，1999），85-107頁。

13）高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局，1982，704頁。

14）真鍋昌弘「中国陝西省華県雨乞背花太鼓踊と日本雨乞風流太鼓踊」東方346，2009，17-20頁。

15）石井 弓「山西省農村における雨乞い―農民の視点から「迷信」を捉える」中国研究月報66-6，2012，1-19頁。

16）高谷重夫「鐘と雨乞」（奥村隆彦・原 泰根編『沢田四郎作博士記念文集』沢田四郎作先生を偲ぶ会，1972），57-65頁。

17）前掲 8 ）。

18）野本寛一『自然災害と民俗』森話社，2013，267頁。

19）宮城清一『石動山 雨乞い考』羽咋 宮城清一，1996，88頁。

20）野口武司「六国史所見の「祈雨・祈止雨」記事」国学院雑誌87-11，1986，216-257頁。

21）藪 元晶『雨乞儀礼の成立と展開』岩田書院，2002，333頁。

22）前掲20）。

23）前掲20）。

24）岡田干毅「日本古代の祈雨・祈止雨儀礼について―」人文論究（関西学院大学）43-2，1993，56-69頁。

25）村瀬友洋「「名山大川」の変遷について」神

道宗教213，2009，79-110頁。
26）村瀬友洋「国家的雨乞儀礼の対象範囲に関する一考察」神道研究集録（国学院大学）18，2004，63-82頁。
27）グラ・アレクサンドル「八～九世紀における飢疫発生記録に関する一考察」アジア遊学79，2005，96-113頁。
28）山口えり「奈良時代の干害・水害と祈雨・止雨儀礼」東アジアの古代文化136，2008，145-157頁。
29）前掲13）。
30）福島好和「天武持統朝政治の一考察―広瀬大忌祭・竜田風神祭の意義―」関西学院史学12，1970，20-37頁。
31）並木和子「平安時代の祈雨奉幣」（二十二社研究会編『平安時代の神社と祭祀』国書刊行会，1986），111-175頁。
32）前掲28）。
33）竹ヶ原康弘「古代祈雨祈祷の施行に関する一考察」史流40，2001，49-58頁。
34）スティーベン，トレンソン「神泉苑における真言密教祈雨法の歴史と善如竜王の伝説」アジア遊学79，2005，72-95頁。
35）前掲34）。
36）前掲13）。
37）藪　元晶「中世法隆寺の雨乞いについて―民間雨乞習俗のルーツ―」御影史学論集37，2012，21-52頁。
38）前掲13）。
39）森　弘子「原八坊と水瓶山雨乞祈祷」（西高辻　信良編『大宰府顕彰会二十周年記念論集』，1997），253-283頁。
40）前掲20）。
41）前掲６）。
42）田上善夫「日本列島の気候変動と大気・海洋の影響」富山大学人間発達科学部紀要7-2，2013，173-188頁。
43）卯田　強「渤海使の航路と気候変動」環日本海研究10，2004，122-124頁。
44）川端俊一郎。前掲43）中のコメント。
45）丸本美紀「奈良盆地と京都盆地における瀬戸内気候としての乾湿の違い」日本地理学会発表要旨集84，2013，124頁。

Climate Disaster and Disaster Prevention Prayer, and Climate Variation in Ancient and Medieval Times

TAGAMI Yoshio

In this study, records of climate festival and climate disaster are examined, and reconstruction of climate variation in ancient and medieval times is attempted. The results can be summarized as follows. 1. Mainly in the Kinki region of 7-12 century, records of pray for rain remain. Many of them have been recorded by the state, and they are relatively consistent. 2. Pray for rain was done upon the occurrence of climate disasters such as drought and it corresponds to the time of emergency. Therefor the record supplements the climate disaster record and it is able to reconstruct the climate change. 3. Pray for rain records increase from around the 8th century, reach a peak in the 10th century and decrease after then. This may indicate the drying trend of the 10th century. 4. At the end of 9th century, long rain records increase, but drought record decrease. This may show the trend of wetting and it is clear from the 880's to 890's in particular.

(Toyama University)

Key words: drought, pray for rain, climate reconstruction, medieval times, Japan